

「弟子になる」

ルカの福音書 14:25～35

はじめに

今回は、宴会を用いたイエシュアのたとえでした。そして結果的にその宴会の席に着いた人々とは「貧しい人、身体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人」そして「無理にでも」連れて来られた者たちで、それらは携挙される私たち異邦人の教会、そして世の終わりの大患難の中で御国の福音を聞いて信じる異邦人、大勢の諸国の民を表していると述べました。それは聖書中唯一の異邦人筆者であるルカが私たち異邦人に対する神のご計画を前面に押し出して福音書を書いているためであるとも述べました。今日はまた新たなたとえが語られてまいります、その意味するところは前回とほとんど同じです。主イエシュアをそしてイスラエルを通して表される神の異邦人たちに対する愛、憐れみ、恵みに今日も目をとめてまいりましょう。シェーム・イエシュア！

1. 憎む

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:25 さて、大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていたが、イエスは振り向いて彼らに言われた。

14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。

14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

この御言葉は多くの場合、キリストの弟子となる者は家族を捨て、命をかけて主に従っていかねばならない、というような意味で解釈されています。そしてそれができていると思込んでいる者には高ぶりを、そしてできていない者には苦しみと悲しみを与えるものとなっています。しかしヘブル語のその本来の意味によってこれを捉えるならば、それとは全く異なる意味を持った良い知らせ、福音、神のご計画の御言葉となります。

ここで「憎まない」「憎む」という意味で使われているヘブル語はサーネー(נִשְׂאָ)は本来、このように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

24:60 彼らはリベカを祝福して言った。「われらの妹よ、あなたは幾千万にも増えるように。あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」

24:61 リベカとその侍女たちは立ち上がり、らくだに乗って、その人の後について行った。こうして、しもべはリベカを連れ帰った。

これはベトエルの娘リベカがアブラハムの子イサクの花嫁として嫁いで行く場面です。その時彼女の家族はこのように祝福して送り出し、そこに「**敵の門を勝ち取る**」という言葉の中で聖書で最初のサーネーが使われています。これは戦争を意味する言葉ですが、本来戦争とは敵を滅ぼすことが目的ではなく、敵の所有している民や財産や領地を奪い、自分たちのものとし、繁栄し豊かになることにあります。このようにサーネーとは本来、敵を憎んでそのすべてを滅ぼすことではなく、まさに「**敵の門を勝ち取る**」ことであり、これを得る、所有することを意味する言葉なのです。ですからイエシュアが言われた「**わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎**」むとは、まさにリベカがイサクのもとに行き、祝福された民とされたように、イエシュアの花嫁となり、イスラエルの家につながり、そして「**自分のいのち**」を得る、勝ち取る者、すなわち救われる者の存在を指し示し、それが私たち教会を指し示すことは言うまでもありません。そしてその証しは「**自分の十字架を負ってわたしについて来**」る、とあるように、キリストとも呼ばれるイエシュアとともに十字架につけられ、死んだ者となることです。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

6:6 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。

6:8 私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなる、と私たちは信じています。

このように「**自分の十字架を負って**」イエシュアについて行くとは、イエシュアとともに死に、そしてイエシュアとともに生きることを意味します。これこそがイエシュアの花嫁なる教会の証しです。私たち教会はやがてこの現実に、この成就に与ります。その信仰を持ち、その日を待ち望みましょう。そしてその日とは、このようにして訪れます。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

励ましなさい、励まし合いなさいと命じられている聖句は数多くありますが、「**これらのことばをもって**」と限定されているものは聖書でこの一箇所のみです。祈るときはこのように祈りなさいと言われた「**主の祈り**」が今日も祈られています。しかし励まし、慰める時に私たちは「**これらのことばをもって**」それを行っているでしょうか。今を生きる私たちのために、主が私たちイエシュアの花嫁なる教会にお与えくださったただ一つの励まし、慰めの御言葉、それが「**携挙**」とも呼ばれるこの預言の言葉なのです。どうぞ今日も「**これらのことばをもって互いに励まし合い**」ましょう。

2. 計算する

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるでしょうか。

14:29 計算しないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人たちはみなその人を嘲って、

14:30 『この人は建て始めたのに、完成できなかった』と言うでしょう。

聖書で最初に塔を建てようとした者たち、それはバベル、バビロンの民です。彼らの王ニムロデは世の終わりに現れる獣、反キリストの「型」です。ニムロデとバベルの民は自分たちの名を上げよう、自分たちが神になろうとして天に届く塔を建てようとしてしました。しかしその計画は天から降りて来られた神によって阻止され、まさに「この人は建て始めたのに、完成できなかった」という結果に終わりました。これは終わりの日に起こる出来事の「型」です。反キリストも自分を神とし、自分の帝国を築こうとしますが、再臨のイエシュアによって阻まれ、滅ぼされます。そのような終わりの日に起こる神のご計画がここには奥義として表されているのです。決して「ご利用は計画的に」というような人生設計をよく考えなさいという教えではないことを覚えてください。ちなみにここで「計算」するという意味で使われているハーシャヴ(חֶשֶׁב)は本来、神に義と「認められる」という意味の言葉で、イスラエルの父祖アブラハムを指し示す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

15:5 そして主は、彼を外に連れ出して言われた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。」さらに言われた。「あなたの子孫は、このようになる。」

15:6 アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

このように、主に義とハーシャヴ「認められた」のはアブラハムであり、その子孫イスラエルであって獣、反キリストではありません。その事実、真実がこの「計算しない人」「建て始めたのに、完成できなかった」人としてここにたとえられた反キリストに対する神のご計画です。

3. 戦う

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとして行くときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうか、まず座ってよく考えないでしょうか。

14:32 もしできないと思えば、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和の条件を尋ねるでしょう。

この「二万人」対「一万」の戦いとは、Ⅱサムエル記 18 章に記されたダビデとアブサロムの戦いを指しています。

Ⅱサムエル記【新改訳 2017】

18:3 兵たちは言った。「王様（ダビデ）が出陣してはいけません。私たちがどんなに逃げても、彼らは私たちのことは何とも思わないでしょう。私たちの半分が死んでも、彼らは私たちのことは心に留めないでしょう。しかし、今、あなたは私たちの一万人に当たります。今、あなたは町にいて私たちを助けてくださるほうがよいのです。」

18:4 王（ダビデ）は彼らに言った。「あなたがたが良いと思うことを、私はしよう。」王は門のそばに立ち、兵はみな、百人、千人ごとに出て行った。

18:7 （アブサロム側についた）イスラエルの兵たちは、そこでダビデの家来たちに打ち負かされ、その日その場所で多くの者が倒れ、その数は二万人となった。

この戦いはアブサロムが言葉巧みにイスラエルの民を騙し、王であるダビデからその民と都エルサレムを奪ったという出来事から始まりました。ここでダビデは「一万人」の兵に相当すると表現されています。これに対するアブサロムの倒れた兵「二万人」とあり、イエシュアはこの記述を指してたとえられたのです。そして神のご計画の視点で捉えるならば、このアブサロムもまた獣、反キリストの型です。彼はエルサレムを奪い、「海辺の砂のように数多く」軍隊を招集してダビデを撃とうとしたと記されています（Ⅱサム 17:11）。世の終わりには反キリストがこれと全く同じように行い、ダビデの子（メシア）イエシュアを信じるユダヤ人たち「イスラエルの残りの者」を滅ぼそうとします。イエシュアはこれらの事実、このようなことが世の終わりに起こることを指し示してこのたとえを話されたのです。

しかしここで注意して捉えなければならない事実があります。それは「戦いを交えようと出て行く」こと、また「もしできないと思えば」という二か所に使われているヘブル語の本来の意味です。ここに使われている「戦う」という意味のラーハム(רָחַם)は本来「敵側について出て行ってしまふ（出 1:10）」という意味の言葉で、攻撃する、殺すというような意味ではなく、逃げる、離れ去るという意味の言葉なのです。そして「勝つ」という意味のヤーハル(יָחַל)は本来「一緒に住む（創 13:6）」という意味の言葉で、つまり「できない」とは戦えない、勝てないという意味ではなく、一緒に住めない、共存協生できないという意味なのです。つまりイスラエルと反キリストはともに住めない、ともに生きることはできないから離れる、別れるということがここにたとえられているのです。実際に終わりの日、反キリストがエルサレムを奪い、神殿をわが物とする時、イスラエルの残りの者は荒野へと追いやられ、岩だらけのボツラへと逃れて行きます。

ではその場合「使者を送って講和の条件を尋ねる」というたとえは、どういう意味になるのでしょうか。ここで「講和」と訳されているのは有名なヘブル語シャーローム(שָׁלוֹם)です。この初出箇所からその本来の意味を考えてみましょう。

創世記【新改訳 2017】

15:13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。

15:14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。

15:15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして葬られる。

15:16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時まで満ちることがないからである。」

これは主がアブラハムと契約を交わした際に語られたものです。「平安のうちに先祖のもとに行く…葬られる…そして…ここに帰って来る」とあり、ここにシャーローム本来の意味があります。それはつまりシャーロームとは葬られることすなわち「死」を意味し、そしてやがてこの地に帰って来ることすなわち「よみがえり、復活」を意味する言葉なのです。では「もしできないと思えば」すなわちイスラエルと反キリストが共存できない敵対関係になる時、遣わされシャーロームすなわち死んで葬られる「使者」とは誰でしょう。これはイスラエルの残りの者、144,000 人のユダヤ人たちの宣教によってイエシュアを信じ、そして殉教していく数えきれないほどの大勢の異邦人、諸国の民を意味します。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

この「大勢の群衆」は「大きな患難を経てきた者たち」その患難の中で子羊なるイエシュアを信じ受け入れた民で、先に携挙された私たちイエシュア・メシアの花嫁である教会とは異なる民です。しかし彼らもまた主の大いなる憐れみのゆえに私たちと同じ天の御座に引き上げられます。そして今度はイエシュアと私たちとともに、再び地に帰るのです。それがシャーローム「平安のうちに先祖のもとに行く…葬られる…そして…ここに帰って来る」という言葉に込められた神のご計画のすべてです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:33 そういうわけで、自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。

そしてそれは結果的に私たちが今地上で持っているすべてを捨てることを意味します。自分の全財産を捨てることで弟子となるというこのたとえはすなわち、イエシュアにあって死んでよみがえることを意味しているのです。

4. 塩

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:34 塩は良いものです。しかし、もし塩が塩気をなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。
14:35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられます。聞く耳のある者は聞きなさい。」

この「塩」とはイスラエルの民を指しています。前回のイエシュアの語られた宴会のたとえ、その締めくくりは「あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。」という食卓から締め出された人々、それは天に引き上げられることなく、地上の大患難を生き残るイスラエルの残りの者だと解き明かしましたが、今日の締めくくりも同じ意味で、ここでは「塩が…外に投げ捨てられます」というたとえになっており、イエシュアは一貫して終わりの日に起こる神のご計画について述べておられるのです。「塩は良いものです。」塩以外に料理に塩味をつけるものはない、とイエシュアは言われました。同様に、「神の国」ではイスラエルによって、イスラエルを通してでしか神の祝福は与えられません。こう記されているとおりです。

創世記【新改訳 2017】

12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

主がアブラムに示された地、エルサレムにおいて、彼の子孫イスラエルの民によって「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」というこの約束、ご計画の成就を主は、御子イエシュアは成そうとしておられます。それは「良いもの」主にトーヴ(טוֹב)と言わしめた神の選びの民イスラエルを外に放り出し、人々に踏みつけられるという苦しみにあわせてでも私たち教会を、そして数えきれないほど大勢の諸国の民を救い出し、よみがえらせ、天にまで引き上げることを主は望んでおられるのです。しかしその真実は、御父が御子を世に遣わし、非情な苦しみにあわせ、十字架にかけて殺し、主を信じるすべての人の罪の贖いをさせたという事実、すでに表わされていました。御子イエシュアを、そして御民イスラエルを犠牲にしてでも私たち教会を、異邦人を救う、主の恵み、憐れみは何と深く、大きく、計り知れないものなのでしょう。今日の冒頭の一節「大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていた」という御言葉は、単なる状況説明ではなく、このように大勢の民を救い、主とともに歩み、生きる者とならせるという神のご計画を表した、今日の結論となるような「型」であったということもぜひ覚えてください。

私はこのような真実が示されるたび、つくづく思います。この御方が神で良かった。他にはない、この御方だけが神で本当に良かったと。みなさんもそう思いませんか？もし神が気まぐれで自分勝手に人のいのちなど何とも思わない、横柄で意地悪な神であったら…考えるだけでもゾッとします。しかし私たちの神は恵みと憐れみに富んでおられ、永遠に変わらない御方です。そしてそんな神に選ばれ、愛され、確かなご計画をもって導かれていることに本当に感謝します。この気持ちは言葉でも行いでも表せません。ただその主の御心、み旨、ご計画が、聖書に秘められたとおりになりますように、この身に、この地になりますようにと絶えず祈り続けるのみです。その祈りが一人ひとりのうちに常にあり続けますように。